

サロン九条295回 「モンゴルとの友好・交流を願って」

話題提供：安藤征治さん(岐阜モンゴル文化協会会長) *参加者 19名

会場入口で、草原に建つゲル、草を食む馬やラクダの絵と共に、「ようこそモンゴルへ」の大きな文字が参加者を迎えました。

岐阜モンゴル文化協会が発足したのは平成19年。初代会長は関市教育長の船戸政一さんで、活動は関市が中心でした。安藤さんは、久野昭治さんの言葉「国力とは武力や経済力ではなく、文化の力であることに人間はそろそろ気づくべき時ではないか」に感銘を受け、国際交流は平和運動であると感じ、2代目の会長を引き受けられました。

モンゴルの面積は日本の4倍、人口は日本の1/40です。ソ連に次いで2番目の社会主義国でしたが、冷戦の崩壊と共に民主化運動がおこり、1992年に資本主義国になりました。日本で「モンゴル」といえば、相撲や、小2の教科書の「スーホの白い馬」などが知られていますが、その他に鎌倉時代の蒙古襲来、モンゴル人と日本人に多い蒙古斑などが有名です。国としては、お互いに歴代の首相が訪問するなど親密な関係を築いています。

岐阜モンゴル文化協会の活動は馬頭琴コンサートや、世界遺産にも登録されている民族楽器の紹介、「スーフと馬頭琴」の絵本出版と岐阜少年少女合唱団によるミュージカル公演、講演、モンゴル訪問や小学校の国際交流活動への参加など、とても多岐に渡ります。

その中で、特に日本でもよく知られている歌手オユンナの活動について紹介がありました。中学校の教科書に掲載されているオユンナのエッセー「ひとひらの笑顔」を馬頭琴のBGMで安藤さんが朗読されました。また、広島の実話をモンゴル語と日本語で歌った「ヒロシマの折り鶴」をCDで聴き、参加者はその歌声に魅了されました。オユンナはコンサートでは必ずこの歌を歌い、モンゴルではとてもよく知られているそうです。

安藤さんはモンゴルを2回訪問されています。モンゴルの地で強制労働により死亡した日本人の墓地、英雄・朝青龍の母校、ウランバートル近郊のゲル、草原の星空、羊の解体など、どれも興味深い話ばかりでした。

最後に現在モンゴルが抱える課題について触れられました。首都ウランバートルへの人口の集中、自由経済による貧富の差、家畜過多による草原の荒廃、異常気象による砂漠化の進行、鉱山開発による水質汚染・・・など近代化ゆえの現象です。そんな中で、モンゴルの自然を守るための気象事前察知の研究等が日本の科学者によってされているという話があり、うれしくなりました。

最後に、恵那市上矢作町福寿の里モンゴル村で行われる7/8・9のナーダム祭、9/3に大垣スイトピアであるミュージカル「スーフと馬頭琴」について紹介がありました。

モンゴルを訪問したことがある人の体験談も加わり、参加者の胸にモンゴルのイメージが更に膨らみました。また、オユンナの歌や話を聞く機会を是非持ちたいという意見も出ました。将来の永世中立国構想を持つモンゴルからは学ぶことが一杯ありそうです。

*「スーホの白い馬」はモンゴルでは通称「スーフの白い馬」です。